Ⅱ.『黄色い扉』の鑑賞について

高木　徹

本校（中学校）では、数年来、教育出版の教科書を使用しているが、２年の教科書の中に「ベンチ」という教材がある。

「ベンチ」は、ナチスの擡頭とユダヤ人への弾圧という時代状況のせいで、ユダヤ人の少年フリードリヒとドイツ人の少女ヘルガとの淡い恋が、はかなく破れてしまうという短編である。主人公の年齢が生徒に近いこともあって、取っ付きやすい作品である。

「ベンチ」は、岩波少年文庫『あのころはフリードリヒがいた』（ハンス・ペーター・リヒター作　上田真而子訳）の中の一編であり、６月頃「ベンチ」を学習した後、中学２年生全員に『あのころはフリードリヒがいた』を買わせ、夏休みの課題図書として読ませる指導をここ数年、ほぼ毎年行ってきた。従って中学・高校をあわせた全校生徒の半数以上が『あのころはフリードリヒがいた』を読んでいることになる。（高校では附属中学出身者が３分の２弱であるため。）

『あのころはフリードリヒがいた』は、フリードリヒを主人公とし、「ベンチ」のような短編32から成る物語である。フリードリヒが生まれた1925年からフリードリヒが空襲で死ぬ1942年まで描き、ユダヤ人に対する弾圧がじわじわと強まり、次第に苛酷さを増してゆく様が具体的な出来事を通じて理解できる作品である。また巻末に付けられた年表を見ると、ユダヤ人の自由や権利が一つずつ奪われてゆく様子が詳細にわかり、「ベンチ」におけるような差別が、突然始まったものではないということを教えてくれる。

1989年度、『あのころはフリードリヒがいた』を原作とする劇『黄色い扉　ーあのころはフリードリヒがいたー』を、地元の劇団「うりんこ」が上演するということを聞き、全校生徒に鑑賞させようということになった。

本校では、例年「憲法記念日」の前後で生徒に講演を聞かせているが、89年度はそれが「アウシュヴィッツ」に関するものであった。偶然とは言え、国語の授業（「ベンチ」）→読書指導（『あのころはフリードリヒがいた』）→講演会（「アウシュヴィッツ」に関するもの）→演劇鑑賞（『黄色い扉』）、という一連の流れの中に演劇鑑賞を位置付けることができた。

事前に中学の１・２年には原作を読ませ、また高校生には原作を紹介した上で、1989年７月10日、愛知県勤労会館で『黄色い扉』の観劇が行われた。秋の文化祭の中に中学では演劇コンクールがあり、それに刺激を与えるという意図もあって、演劇コンクールの準備が本格化するこの時期に演劇鑑賞を設定した。

鑑賞後、生徒に書かせた感想文の一部を以下に紹介する。（本校の「学校だより」からの転載である。）

〈中１男子〉

ぼくは「黄色い扉」を見るのが、とても楽しみだった。そして劇を見たらとてもよくわかった。たぶん劇を見る前に本を読んでいったからだろう。

劇は、最初の方は、ほとんど飛ばしてあったからぼくは「アレッ」と思ってしまった。そしてフリードリヒと同じアパートの男の子が、キャッチボールをしていて男の子が、人の家のガラスを割ってしまったのに「フリードリヒがやった。」とおばさんが、言ったのでとてもかわいそうだった。そしてだんだん年が過ぎていくごとにユダヤ人だけは、とてもひどい差別をされていったので「どうして人間はみな平等なのにユダヤ人だけそんな差別をするんだ。」と言いたくなってしまった。

そしてもっとひどくなるとドイツ人が、ユダヤ人の家に無断で入りこんで家をあらして帰っていくっていう事もあった。ぼくは、「ムシャクシャ」してきた。

レッシュ氏は、じぶんがドイツ人だから急にフリードリヒの父に「でていけ！！」と言ったりしたので、にくらしくなった。それに空襲を受けた夜、レッシュ氏やドイツ人は、みな防空壕に入った。フリードリヒがあとから来て「入れて下さい。」とたのんでもレッシュ氏は、入れてやらなかった。

フリードリヒは、結局道ばたに座ったまま死んでいた。とてもかわいそうだった。

〈高２男子〉

第２次世界大戦でのユダヤ人迫害については、中学生のときに文化祭で「アンネの日記」を実際に自分たちでやったこともあり、今回見た劇の内容もだいたいの予想はついていましたが、「アンネの日記」のときは素人の中学生の演劇だったのに比べ、今回は劇団の人たちの演劇だったので結構真剣に見ることができました。

第２次世界大戦でフリードリヒやその家族のように悲惨な目にあったユダヤ人は約600万人と言われています。この数は名古屋市民の３倍もの数になります。またドイツ独裁者であるヒトラーの行った政治が許せ

ないのと同時に私たちの国日本も南京大虐殺という許せないことをしたことを忘れてはならないと思います。

今日、この地球上には地球をも破壊する兵器が存在しています。もし再び戦争が起こった時、たった二つの国の争いの為に私たちはすべてのものを失ってしまうことになります。他にもフロンガスをはじめとする様々な有害物質が世の中に出回っています。そういったことからも地球は破壊されているということは認めなければならないでしょう。これらのことが原因で私たちみんなの地球を破壊することはとても悲しいことです。そんなことのないよう、戦争反対や環境問題についていろいろ訴えることはとても大切だと思います。そういった意味で今回のような戦争反対を訴えるような演劇は久しぶりに見ることができて大変よかったと思います。

（注）この生徒は、附属中学出身ではないので、多分原作を読んでいないと思われる。

〈高３女子〉

「あのころはフリードリヒがいた」この原作は、中学２年生のときに読んだ。内容を変えて上演される劇が多い中、原作に沿って表現されていて良かった。

演劇になったものを見て、中学のときとは又別の感想を持った。それは、戦争は物を破壊したり、人を殺したりするのではなく、人の心、人間関係を破壊するのだということだった。今まで戦争についていろいろ学んできたが、それは表面を見ていたでけであり、内側は見てなかったことに気づいた。人を愛することも、親友との友情も破壊してしまう。人の心を狂わすあのナチスの扇動力。これは日本でも言えることがだが、隣人、兄第、親子をも売ってしまうあの恐ろしい力はどこからくるのだろうか。人間には恐ろしい力が秘められていることを痛感した。

学校全体で平和教育を行うことはとても良いことだと思う。しかし、いつもこの学校がとり上げることは受け身の側での戦争であり、日本の加害者としての戦争は少しも取り上げていないようだ。

日本の加害者としての立場は、ナチスと同じくらいいや、それ以上かもしれない。日本はいつも被害者の立場からしか戦争を見ていない。日本もアジアでは残酷な虐殺を行ったことを知っている人はどれほどいるだろうか。これからは加害者、被害者、両方の立場の日本を学び、戦争そのものがどんな物か考えるべきだ。